

駿建

2014 Apr. Vol.42 No.1

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

# SHUNKEN

Quarterly Journal of

Department of Architecture. College of Science and Technology, Nihon University  
& Department of Architecture and Living Design. Nihon University Junior College



Special Feature

あれから ○年

卒業生 たちの今

# あれから

# ○年

# 卒業生

# たちの今

ついに2014年度がはじまりました。

春という季節、きっと皆さんは、色々な期待と不安で心がいっぱいになりながら、さまざまな“はじめてのこと”を体験していることでしょう。

そして、そのワクワクとドキドキの原因のひとつが「就職」の人も少なくないはず。

将来自分は、どの道に進もうか、進むべきなのか、その問いには、簡単には答えが出せないと思います。

そこで今回の特集は「就職」をテーマに、9名のOB/OGの方々に登場いただきました。

しかも、今回登場いただくOB/OGの皆さんは、

ついでの前まで、大学生、大学院生だった、卒業してから1～4年の方ばかり。

OB/OGの皆さんが、皆さんと同じころ、

どんなことに悩み、考え、そしてどういう行動を取り、決断していったのか、

一つひとつのエピソードをサンプルとして、皆さんの進む道の参考にしてみてください。

## 仕事・就職にまつわる名言集

“成功を手にした人たちは何が違うのかというと、「行動を起こしている」ということです。問題は、やるかやらないかなんです。”

秋元 康 (作詞家/放送作家/プロデューサー)

“未来を見て、点を結ぶことはできない。過去を振り返って点を結ぶだけだ。だから、いつかどうにかして点は結ばれると信じなければならない。”

スティーブ・ジョブズ (実業家/アップル共同設立者)

“変えてうまくいかなかったら、一生後悔する。ここまでくれば、貴くことが大事。”

本田 圭佑 (プロサッカー選手)

“世俗的な野心を持たないのがいい生き方だ。と思っている人たちがいるけど、それは違う。ちゃんとした真っ当な野心を持たなければ駄目だよ。”

宮崎 駿 (アニメーション作家/映画監督)

“悩んでる・・・？ いや、悩んでなんかないね、単に甘たれてるだけだ。いっぺんでいいから本気で悩んでみる!!”

ドラえもん (ネコ型ロボット)

“自分のできることをとことんやってきたという意識があるかないか。それを実践してきた自分があること、継続できたこと、そこに誇りを持つべきだ。”

イチロー (プロ野球選手)

“失敗する人には2種類ある。考えたけれども実践しなかった人と、実践したけど考えなかった人だ。”

ローレンス・J・ピーター (教育学者)

“チャレンジして失敗することを恐れるよりも、何もしないことを恐れる。”

本田 宗一郎 (本田技研創業者)

“他人と比較して、他人が自分より優れていたとしても、それは恥ではない。しかし、去年の自分より今年の自分が優れていないのは立派な恥だ。”

ラボック (探検家)

# “できるだけ多くの場所をたずね、多くの人に会おう!”

OB/OG no.1

## 佐脇 三乃里

2011年大学院修/佐藤慎也研究室  
→アートまちづくり系NPO団体勤務



学部4年生の時、研究室で取り組んだ「+1人/日」プロジェクトにて研究室のみんなと記念撮影。後列右から3人目が佐脇さん。

**建** 築を設計するように、展覧会やアートプロジェクトをつくることへの関心があり、「建築とアート」をテーマに研究活動を行っていた佐藤慎也研究室を選択しました。研究室では、主にアートプロジェクトへの参加やアーティストと一緒に作品を制作する活動を行いました。それらは作品が守られて展示される美術館や劇場といった場所ではなく、都市や街の中でプロジェクトを展開するといった内容の活動でした。そのような体験や経験を通して、場所と表現をすることとの関係性を考えるようになり、アートの現場に建築の技術や考え方が入っていくことの面白さを感じることができました。

大学の授業では何よりも建築設計の授業が好きでしたが、学部2年生の時から建築ではない別の何かを求めるようになっていました。それが何なのかを探るために、学部卒業後は就職ではなく大学院へ進学（建築以外の分野に進むことも含めて）することを考えていました。佐藤慎也研究室に所属して、都市の中で行なわれるさまざまなアートプロジェクトに関わる中で、研究

室のテーマである“建築”と“アート”との接点や可能性についてより一層考えるようになり、大学院2年生になってようやく、社会に出ることについて本気で向き合うようになりました。

しかし、“建築”と“アート”を切り離さずに働ける場所っていったいどこにあるのだろうか？そこでは一体何ができて、何をj得ることができるのだろうか？そんな疑問が不安となり、働く場所を決めるまでは不安をずっと抱えていました。自分ひとり考えていても答えが見つからないので、とにかく信頼のできる人に相談しまくりました。人の意見から何か答えを見つけようとしていたのですが、不安は不安のまま。けど、人に話すことで考えを整理することができ、最後は自分の中から答えが見つかりました。

今は、“アートによるまちづくり”を推進しているNPO団体「NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター」という組織で働いています。卒業研究で横浜市の施策「クリエイティブシティ・ヨコハマ」の取

り組みについて研究したのがきっかけでした。特に、創造界隈を形成するアーティストやクリエイターが集積する拠点の成り立ちについて調査を行い、集まることで新しいことが創出される現場にとっても興味を抱きました。その関心から、大学院1年生のときに有志のアーティストやクリエイターたちが主催となって開催される「関内外OPEN!」というイベントのインターンをしました。そして、インターン終了後に、お世話になった方から「黄金町エリアマネジメントセンター」でのアルバイトを紹介していただき、実際に黄金町の取り組みに参加。そこで“アートによるまちづくり”を推進しているNPO団体の建築とアートの双方の視点から取り組む事業に可能性を感じ、大学院修了後にスタッフとして採用していただきました。

「黄金町エリアマネジメントセンター」は、地元住民、警察、行政、大学の組織と連携し、“アートによるまちづくり”を推進している団体です。黄金町という街は、かつて違法風俗店が建ち並んでいた地域でした。2005年1月、警察による一斉摘発の後、空き店舗となった場所を活用して、アーティストやクリエイターのアトリエ・スタジオに改装し、アートイベント、アーティスト・イン・レジデンス、国際交流、スクール、まちづくりなど、複数の事業を展開しています。現在、私はディレクターのアシスタントとしてプロジェクトマネージャーの役割を担っていますが、企画から広報、現場の作業まで何でもやっています。とにかくやる気と体力が大事です（笑）。

学生時代も大学の外で社会との接点を持つ活動をしていましたが、同じことでもいざ社会人として携わると、全く異なりました。さまざまな場面で、学生時代には感じたことのない、目には見えない社会の仕組みのようなものをビシビシと感じました。経済的な知識や常識・マナーなど、自分が至らないことも突きつけられます。新しい情報を得ながら、その仕組みの中で組織や個人の役割を考えながら、目の前にある膨大な量の仕事をこなしていく、そのバランスが今でも難しいと感じています。

あれから

〇年

卒業生

たちの今

3  
years  
since I graduated.

一方で、考えたことや手を動かしたことが事業として実現していくのが見えた瞬間はとてもやりがいを感じています。また、言葉や文化が異なるさまざまなアーティストに出会うことで日々刺激を受けているのも、やりがいのひとつです。どんなに忙しくても、好きだからこそ続けられる仕事だと思っています。

10年後も、具体的ではないですが、“建築”と“アート”をキーワードに、アーティストが活動する場所の可能性について考えていきたいです。最近、仕事で東南アジアへ調査に行く機会をいただきました（写真）。同じアジアの異なる地域で、同時代に生きるアーティストたちに出会い、文明が発達するスピードも、文化や都市の成り立ちも異なる地域のアートスペースを見て

きました。アートが持つクリエイティビティは、表現として作品をつくるだけでなく、コミュニティと場を形成しているように感じました。冒頭にもお話しした「アーティストが活動する場所の可能性について考える」その先で、地域や国を超えて、同時代に生きるアーティストが集まるプラットフォーム（それはまだどんなカタチなのか分かりません）を形成することにつなげていきたいと考えています。

学生でやりたいことが明確に見つからない方には、できるだけ多くの場所を訪れ、多くの人に会い、たくさんの経験をするをおすすめします。ちょっとした興味でも、今できることを行動に起こしてみてください。成功も失敗も、まずは動いてみないと何も始まらないと思います。



仕事で訪れたタイ・チェンマイのギャラリー前にて記念撮影。手前右が佐脇さん。

## “視野を広げるため、建築以外のことにも積極的に!”

OB/OG no.2

### 針谷 未花

2008年短大卒/小石川研究室  
→2011年学部卒/山崎研究室  
→ランドスケープ事務所勤務

**短** 大1年生の時のある授業で見たコンペの作品がとても印象的で、実物が見たくなり、後日友人と一緒に訪ねたのが、小石川正男先生（当時短大教授）のアトリエでした。その日は、たまたまアトリエで学部ゼミ生の卒業設計の指導が行われる日で、小石川先生は熱心に指導をされていました。その様子やアトリエのアップホームな雰囲気もあって、小石川研究室を選びました。その後、建築学科に編入をしてからは、短大では学ぶことがなかったランドスケープに興味を持ち、別の視点から建築を学んでみたいと、山崎誠子先生（当時建築学科助教）の研究室に入りました。

就職については漠然としたイメージしかありませんでしたが、3年生で学部編入して、就職説明会などに行き始めて、建築関係の職業は他の業種に比べて、それほど選択肢が無いことを知りました。どの説明を聞いても、自分が思い描いていた仕事内容と違う。そのギャップを感じながら、いろんな業種の説明会などに参加しましたが、当時は自分がやりたいことは何か、向いている仕事がかかからない状態でした。迷いや不安ばかりでした。

次第に周りの友人たちの就職がどんどん決まっていくので、焦りもありましたが、自分が納得いかない状態で、どこでも良いから就職しようという気にはなれませんでした。そこで、卒業後に山崎先生にお願いをして、研究室の助手という名目で所属させていただきました。先生のランドスケープ事務所のお手伝いなどをするうちに、最初は建築を別の視点から学んでみたいという目的だったランドスケープに対して、知れば知るほど興味が沸いていきました。と同時に、自分は緑に関わる職業に就きたいと、ようやくやりたい方向性が分かってきました。

やがて正式に山崎先生の事務所にアルバイトとして入り、今はスタッフとして働いています。もう約4年が経とうとしています。事務所では、昨年の4月から設計業務以外に花屋を始めたのですが、私は設計業務にたずさわっています。事務所のプロジェクトは主に個人邸の庭、集合住宅や公共施設の外構の設計などさまざまな規模の仕事をしています。基本的には先生がたたき台を作り、それを元に図面を描く。図面を描いたら終了ではなく、施工現場へ行くと、設計通りに進んでいるかといったことをチェックしたりもします。街路樹の調査のような設計以外の仕事もするんですよ。

突然「締切は今日中に!」と言われるととても大変です。今でもたまたま事務所のテーブルに図面が置かれていて、「今日中に図面化して出しておいて」と言われる時が



短大1年生のときの友人との記念写真。中央が針谷さん。

ありますが、やはり何度経験しても急なタイムリミットのある仕事には、気持ちの余裕が持てません（笑）。ただ、どんな仕事でも任されている仕事が一段落した時には、やり遂げた感があります。因みにうちの事務所は建築事務所からお仕事をいただくことが多いので、ひと段落とは、設計事務所の担当者に最終図面を送った時になります。

ランドスケープは、庭を設計するだけでなく、里山の保全や街並みについても考える、とても幅が広い分野です。日本では一般的にあまり認知されていないこともあるので、10年後もこの仕事を続けられているかは分かりません。ただ、私は何かしら緑に関わる仕事に携わっていければいいなと思っています。

学生の皆さんは、建築関係のことにはアンテナを張っていると思いますが、建築以外のことでも興味があるものがあれば、積極的に見に行ったり、体験してみたりすることをお勧めしたいです。なぜなら、世の中は、いろいろなものや職業に溢れているのに、いつの間にか視野が狭くなっていて就活を通して感じたからです。特に海外のような場所は社会人になると何週間も休めなくなるので、学生の時に行くのがチャンス。色々な経験をした方が、やりたいことが見つかると思います!

3  
years  
since I graduated.



現在働く、ランドスケープ会社 GA ヤマザキにて。

# “アドレナリンが出続ける夢は、社会に出てから見つかりました”

OB/OG no.3

## 中井 翔也

2011年学部卒/横河研究室

→現代美術家アトリエ勤務

→アトリエ系設計事務所勤務

**学**部を卒業した僕は、美術家・村上隆さんの元で働き始めました。世界を舞台に第一線で仕事をするという事は、どうしたことなのかを現場で学びたかったからです。そこに建築や美術などのジャンルは関係ないと思っていました。しかし、24時間、ほとんど休み無しで仕事を要求され、実際は半年と持ちませんでした。どんな世界でもやっていけるという自信があったのに、なぜ続かなかったのか。それは、村上さんの仕事に心底共感していなかったからかもしれません。興味があるということと、やりたいこととは違うことなのだと気づかされました。

仕事を辞め、貯めたお金でフランスへ行きました。ル・コルビュジエの建築を見て、こんな設計ができるようになりたいと強く思いました。帰国後は横河先生の設計事務所でも働いていたのですが、新しい事務所を設立しようとしていた建築家の吉田明弘さん（建築学科非常勤講師）と出会い、オープニングスタッフとして参加することになりました。

建築の仕事に就いてみると、状況が違いました。たとえ理不尽な状況に直面しても、すべてが自分の設計のためになると思っただけで仕事に取り組んでいます。また、打ち合わせなどでも「言わずにはいられない」「その寸法は許せない」といった場面があると、決定権の無い立場でありながら、どうしても意見をしてしまうことがありま



1年生のときに訪ねた落水荘にてスケッチをしている中井さん。

す。それは、もっと良くしたいとか、こうあるべきだ、という思いがモチベーションになっています。これは僕が日大の建築学科の4年間で勉強したことなのかもしれません。つまり、知らないうちに、僕の根はつくられていたのです。今では、クライアントとの最初の打合せから竣工まで全てのプロセスに関わりながら、ボスの吉田さんとともに建築設計の充実した毎日を送っています。話し出すと止まらない吉田さんの夢と愚痴を聞くのも僕の仕事です。

個人的に設計の仕事が入ってくることもありました。当たり前かもしれませんが、モチベーションが断然違いました。朝から晩までそのことを考えているし、夜中も気付けば朝になっているくらい夢になっていました。そして何よりも、相手を喜ばせたいという思いが強くなりました。それまでは興味の対象が“建築”だったのが、

人を喜ばせることに変わったのです。だからそのためにも、いつか僕は設計者として独立して仕事をしたい。この時はっきりとそう思ったのです。

学生時代は不安はありませんでしたが、いざやってみると設計の世界は憂鬱なことばかりです。職人さんがせっかくなつくってくれた箇所にやり直しの指示を出さなければなりませんし、億単位の減額をするために設計をやり直したこともあります。設計者として独立して建築家の仲間入り、例えばポジティブですが、それは尊敬している建築家の方々がいわば商売がたきになるということなのです。また、同級生と仕事の話をすれば隣の芝はいつも青く見えますし、長いものに巻かれたくなることもあります。こういう状況で、「でも、それでも」と大人げなく青くいられる事柄が、いわゆる夢と言われるものなんだと思います。私の場合はいろんなところに身を置いてみて、やっと設計が好きで自分の性に合うことに気がつきました。いつまでも続けたいと思っています。

だからこそ、今では不安なことがあっても長い目で考えるようにしています。一度社会に出てしまうと、どんな働き先であれ、あなたの本気を要求されると思います。だから、今学生の皆さんに伝えられることは、すぐに答えは見えなくても、自分がずっと続けていることや、自然と本気になる時はどんな時かを整理すると、いつか大変役に立つのではないかと思います。

阪

3  
years  
since I graduated.



現在働く、設計事務所ヨシダデザインワークショップにて。

## “普段の生活の中で、色々な疑問を持つようにしよう”

OB/OG no.4

### 赤瀬 玲央奈

2011年学部卒/今村研究室  
→アトリエ系設計事務所勤務

大 学に入り、初めての設計の授業で担当して下さった TA の方が今村雅樹先生の研究室の先輩でした。1年生の冬に先輩の紹介で今村研究室の卒業設計を手伝ったのがきっかけで、研究室の先輩方と接する機会が多くなっていきました。研究室の雰囲気がとても自分に合っていました。先輩を通じてゼミなどの様子を知り、入ることを決めました。当時在学中の先輩方の進路が自分の進みたい方向に近かったのも大きな理由ですね。

学部生の頃は組織設計事務所に勤めたいと考えていたので、進路に不安を感じることはありませんでした。当時は、ゼネコンや組織事務所のアルバイトに勤しんでいました。しかし、4年生の卒業設計で思うような設計ができず、今まで建築のことを漠然としか考えていなかったことに気づかされました。そこで、もっと色々な環境で建築について見てみようと思い、建築学会の学生ワークショップの運営に携わったり、いろんな設計事務所のお手伝いに通ったりしました。そうする中で、組織ではなく小規模でかつ若手建築家の設計事務所に勤めたいと就職のイメージが変わってきました。

あるプロポーザルコンペの公開審査の会

場に展示されていた、プレゼンボードの中にとても気になるボードがありました。その事務所を自分で調べて直接アポイントを取ってうかがったのです。事務所を主宰する建築家の小川博央さん（建築学科非常勤講師）は、自分と同じ瀬戸内海出身で、東京を拠点にしながら地元の仕事もされていて、自分の目指すところと近く、大きく惹かれました。実際に会って、進行中のプロジェクトなどをうかがい、その場で事務所に入れて欲しいと頼みました。その時は新しくスタッフを入れる予定は無かったので、必要になったら連絡すると言われて帰ったのですが、数ヶ月後「明日から来られますか？」と電話があり、「明後日からなら大丈夫です」と即答して就職することになったのです。

今は、小川さんの設計事務所のスタッフとして働いています。クライアントとの打ち合わせから始まり、図面を描き模型をつくる。学生の皆さんが設計課題でやっていることの延長だなという部分もあれば、着工するにあたって必要となる行政や確認申請機関との協議、実際に現場に出て工事が設計通り進んでいるかの監理や調整など、さまざまな仕事があります。事務所は小規模なのですが、その分、複数のプロジェクトを担当させてもらえるので、その点はとても魅力的だと思っています。

一番大変だったことは、初めての担当プロジェクトでの図渡し（施工業者への見積もり用の図面提出）でしたね。何も分からないまま事務所にこもってひたすら図面を



学部1年生の頃、船橋の製図室で模型をつくっている様子。

描いて提出しました。学生の頃の設計課題は楽しかったなと思いました（笑）。建物の価値は金額ではありませんが、実際にクライアントのお金で自分の描いた図面が元となって建築が作られていきます。そう思うと怖い気持ちもありました。2件目以降は、何をしたいかわからないで悩むことから、どうしようか悩めるようになって設計が更に楽しくなりました。何と言っても竣工した時にはやりがいを感じます。図面で悩み、現場で悩み、やっと建ち上がった姿を見ると何とも言い難い感覚になりました。

10年後とは言わず、この先ずっと設計の仕事が続いていると思います。これはやめられません。自分の設計で地元へ何か還元できるようになりたいという気持ちで設計をしているので、いつか生まれ育った伯方島（愛媛県今治市）に建築をつくれば嬉しいですね。将来について考えることは難しいとは思いますが、とにかく考えてみるしかないですね。あとは、普段の生活の中で色々な疑問を持つようにすること。その疑問を分からないまま放置しない癖をつけていくこと。そうすれば、色々見えてくる。そして、何事にも楽しみながら生活してみてもいいことだと思います。■

3  
years  
since I graduated.



現在働く、小川博央建築都市設計事務所にて。



## “学生のうちは失敗しても、まだまだやり直せる!”

OB/OG no.5

### 松田 歩弓

2012年大学院修

/空間構造デザイン研究室

→ 確認申請機関勤務

学部のころから構造の授業が好きで自然と構造の研究室に進もうと決めていました。空間構造デザイン研究室を選んだのは、先輩や先生の気さくさや、授業の楽しさに惹かれたからです。構造からデザインを考えるという、通常とは逆のように感じるプロセスにも関心がありましたし、校外の活動や、下級生を集めて幅広く活動していること、卒業生の方が多く、色々なお話を聞けそうなことも魅力に感じました。

学部3、4年生の頃は、大学院へ進学すると決意はしていたものの、周囲の友人たちが就職活動をしている中で、自分は何もなくてよいのか、大学院でやっていけるのか、と不安に思っていました。そこで、大学院在籍時の就職活動の参考になればと、エントリーシートを友達と一緒に考えさせてもらったり、会社説明会にも参加してみました。おかげで、大学院生での就職活動の時は、考えが分散したり、情報が錯綜してしまうこともなく、集中して行うことができました。

ただ大学院での就職活動は、学部の頃の就職活動とは進め方が違い、研究活動と並行して行わなくてはならず、多くの会社にはエントリーすることができませんでした。また、その時行っている研究や勉強が、実務においてどのように関わるのか見当もつかず、就職してから技術者として活躍できるのかという不安が常にありました。

そんなある日、建築学科教室事務の方から求人メールが届き、それまで就職先として考えていなかった民間の確認申請機関での構造審査補助員という業種に興味をわき、会社説明を聞きに行きました。正直なところ、このような業種があることもほとんど知らなかったので、説明を聞いた時にはとても新鮮な気持ちになり、また、建築技術者としてのキャリアを積めることや、数多くの物件に関われることにも魅力を感じました。

今、私は確認申請機関の構造審査補助員として働いています。学生の皆さんにとってはなじみのない特殊な仕事のように感じるとは思いますが、実際に建物を建てる時にはほとんどの物件で構造の審査を通ることになります。申請された物件が建築基準法に適合しているかを確認することが主な仕事ですが、それまで基準法に触れたことがほとんどなかったため、最初はどこにどのような内容が書いてあるのか、どのように法律を読んでいくべきなのかが全くわからず、とても苦労しました。また、知識が少なく必要であるはずの検討が足りないことなどにも気付けないため、構造計算に必要な知識を身に付けるために毎日勉強しました。

今では、少しずつですが実際に審査するようになり、足りない検討や間違った計算に気づき、設計者の方にお知らせすることができるようになりました。建物の安全性を保つことに少しでも役に立てているのかなと思うとやりがいを感じています。



M1のとき、実験室にて。

今は補助員という立場ですが、資格取得を頑張って、いずれは一人で審査できるようになることが一番の目標です。審査以上に、設計者の方に難しい判断を要する物件について、構造審査の視点から相談にのれるようになりたいと思います。

後輩の皆さんに言えることがあるとしたら、とりあえず気になったら動いてみることでいいと思います。また、勉強でも、バイトでも、サークルでも今やっていることを、自信を持って、こんなに目標に向かって頑張ってる!!と言えるようになるまでやってみることがとても大切だと思います。その時にプロセスを考えながら頑張れば、社会に出て役に立つ!学生のうちは失敗しても、思ったことと違って、まだまだやり直せます。自信を持ってこんなに目標にむかって頑張ってる!!と言えるなら失敗しても成功です、成功経験を積んでください!

殿

2  
years  
since I graduated.



松田さんはいつもこの机で、設計者との打ち合わせや、普段の審査業務を行っている。

# “他人と自分を比べることなく、自分らしい生活を楽しんで!”

OB/OG no.6

## 石原 愛美

2011年学部卒/佐藤光彦研究室  
→東京藝術大学大学院  
→リヒテンシュタイン大学留学

**研** 究室を選ぶ時、設計系の研究室に行きたいとは思っていましたが、どこにしようかとでも迷いました。研究室の先輩や同期の顔ぶれも気になりましたが、最後は自分がどの研究室で何を学びたいか、そのためにはどの先生に師事することが最適なのかを考え続けました。そして何よりも先生自身の作品に興味を感じ、その創作の起点にある感性を身近に感じてみたい。そういう気持ちから佐藤光彦研究室を選びました。

私は学部を卒業後、東京藝術大学の大学院へ入学しました。そして、今は大学院の卒業を控え、これから社会へ出て行くことについて、不安を持っています。なぜなら、これからの建築家がどのようにふるまい、社会に貢献できるのか、従来のような「建築家」としての身の振り方、働き方が、震災以後、今後も大きく変わっていく社会の仕組みに適合し得るものなのか、ということに疑問を持ち始めたからです。そして次世代を担う私たちが「建築家」として要求される本当の職能は何か、ということに常に意識するようになりました。



学部4年生で行った研究室旅行にて。中央が石原さん。

今までは建築設計という分野で共に学ぶ友人や先生との議論が中心でしたが、最近では他領域の分野で活動する方々との議論などに以前よりも時間を多くとるように心がけています。なぜなら今までの建築学科での生活において、同じ建築畑の人たちの中でなされてきた議論がしばしば社会の需要から乖離してしまったり、それらがある種の神話性を帯びてしまうことに疑問を感じたからです。他分野の方との交流を介して、一歩離れて建築を客観視することで、これから日本で社会に出る上での自分の役割を考えるきっかけになりました。

今、私はスイスの隣国、リヒテンシュタインという国で交換留学生として1年間勉強しています。国際色豊かな環境で建築を学ぶことで、現在の日本を客観視することができるのではないかと考え決断しました。一方で、日本を離れ、日本の社会と切り離されることでブランクができるのでは、と不安もありましたが、自分自身の思考の整理や設計技術の進歩のためには、学生生活の1年間を留学生として海外で過ごすことは良いのではないかと思います。

新しい環境で一番苦労したのは英語でのコミュニケーションでした。新たな進学先の大学院、留学先ともに外国人の先生に師事しているので、もちろん全てを英語で話すことが求められます。言語の難しさもそうですが、日本語を使わずに自分の建築的思考を表現しようとする時、今までいかに建築学生の中だけで使っていたような、曖昧な日本語の表現に頼っていたのかということに気づきました。彼らにはそのような日本語独特のニュアンスが通用しないので、自分の思考をいかに明確かつ確かな英語の言葉に整理して伝えるのかということが、自分自身の良いトレーニングになっています。

皆さんと同じように将来に疑問を持っている一上級生として、今の学生生活や研究室選びなどに迷いを感じている学生のみならずに伝えられることがあるとすれば、他人と自分を比較することを一切止めることだと思います。私自身、学部生だった当時は、相当な負けず嫌いだっただけでもあり、特に設計課題の際には常に周囲の友人と自分を比べてしまうクセがありました。日大理工の建築学科は学生数も多く、常に友人や先輩後輩と切磋琢磨し合える、素晴らしい環境だと思いますが、常に他人と比較してしまいがちだった私にとっては、その状況が自分自身にプレッシャーをかけていたことも事実です。多くの学生がいるからこそ、多様な建築的思考や将来の展望などが生まれます。そのことを今、皆さんが置かれている環境の最大の利点だということを認識して、人と比べず確固とした自分自身を持つことが、これからの社会や異なる環境に身を置いていく上で重要になっていくのではないかと感じています。自分らしさを常に忘れず、今しかできない生活をのびのびと楽しんでください。

■



生徒の8割は他国からの留学生。みんなで集合写真を撮る。前列、左から2番目が石原さん。

3  
years  
since I graduated.

# “やりたいことがすぐ見つからなくても、アンテナは立てておこう!”

OB/OG no.7

## 丸山 義貴

2013年大学院修/今村研究室  
→組織設計事務所勤務

**設**計課題は、住宅などのスケールからだんだんと不特定多数の人が使うビルディングタイプになっていきますよね。3年生後期の設計の授業で今村雅樹先生に見ていただき、今村先生のパブリックに対するテーマ設定や考え方が、当時の自分には必要なのではと考えました。それが今村研究室を選んだ大きなきっかけとなりました。あと先生のプレゼンの上手さに惹かれたことも大きかったです。

就職や社会に出ることをしっかりと考え始めたのは大学院1年生の秋頃でした。といっても学部の3年生の頃には既に組織設計事務所に行きたいなと、なんとなく考えていました。もちろん就職できるかどうかの不安はありましたが、社会に出ることへの不安はありませんでした。進む先も今までやってきたことの延長線で、今度は実際に建つものを設計できるのだから、むしろ早く出たいとも感じていました。

実際に就職が決まるかどうかということについては不安でしたが、今までやってきたことのブラッシュアップをひたすら行っていました。課題での作品や卒業設計は、提出した時が終わりではなく、もめばもむほど、自分が何をしたかったのかということも練られてきますし、図面自体の密度も上がっていきます。それをひたすら繰り返すことで、不安が自信に変わっていったように思います。

# 1

years  
since I graduated.

今僕は、日本設計という組織設計事務所で働いています。日々、新人研修としてさまざまな部署をまわっているところです。ちょうど今は、実施設計を専門に行う部署で基本設計で提案した建築を実際に成立させるにはどのようにすれば良いか、どのようなディテールならば建築として成立するかを日々考えたり、メーカーとの打ち合わせによって、それらをつめていくを行っています。

働き始めて、まず困ったことは専門用語がまったくわからないということでした。打ち合わせでは専門用語が飛び交うわけですから、最初の頃はまるで外国にいる気分。わからない単語が出るたびにメモを取り、すぐに検索するなどして、今では何とかついていけるようになりました。トップダウン式でボスのデザインをただ形にするという会社ではないので、1年目にしてデザインを任せられます。とはいってもチームですから、チームで決めた建築のコンセプトに自分のデザインが合っているのかをしっかりと把握しながら、時には議論を交わし進めていくのは難しい面もありますが楽しいです。

10年後は施主とより良い関係を築けるようにはなっていたいですね。しっかりとした知識を身につけ、自信を持って接することで信頼してもらえるようになりたいです。施主の言うことを聞いているだけ、自分の考えを押し付けているだけでは、決して良いデザインは生まれません。逆に、関



卒業設計審査後の懇親会にて。

わった人みんなが楽しいと感じる仕事にできれば、必ず良い建築ができると思います。そんな環境をつくり出せる存在になって、楽しい仕事をしたいですね。

学生の頃から明確にやりたいことが見つかった人の方が、むしろ珍しいと思います。明確に見つけなくてはと思うと、やりたいことの範囲の設定が狭くなりがちですが、あまり深く考えると、どつぽにはまるだけのようになります。組織設計事務所に勤めていても、設計する人たちだけで動いているわけではありません。どんな会社でもそうだと思いますが、会社がジャンル分けされていても、実際にその中にはジャンルにとらわれない、さまざまな人が働いています。案外、会社に勤め始めてからやりたいことが見つかるかもしれません。見つからないなら見つからないで、その時の流れに身を任せても良いのではないのでしょうか。ただ、何がしたいのかを受信するアンテナだけは常に立てておくことは忘れずに！

■



現場でカーテンウォールの取り付けを確認しているところ。

# “常に自分を見つめ直す、就職してもやりたいことは変わっていくから”

OB/OG no.8

## 内山 かおり

2013年学部卒

/八藤後・中田研究室

→建設コンサルタント勤務

**大** 入学当初は「大きなものをつくれるようになりたい！建築カッコイ！」という単純な考えでした。しかし、学部3年生の頃から、建物だけをつくり込むことに少し疑問を持ち、建築とそれらを取り囲む環境や景観との関係に興味が出てきました。次第に、たくさんの人が楽しく快適に過ごせるまちをつくれるようになりたいと感じるようになり、そこで出会ったのが「人間工学」という分野でした。建築や街の中で何気なく見られるモノの形や大きさ、広さ・高さなどにはすべて根拠があり、そのおかげでみんなが安全に過ごすことができるのだと知り、この分野を活かして快適な空間をつくれるようになりたいと考えて八藤後・中田研究室を志望しました。

授業や研究室で人間工学などを学ぶうちに、子どもに楽しんでもらえる公園や遊具をつくって貢献してみたいと考えるようになり、就職活動として遊具会社をいくつか訪問しました。しかし、なかなかそういった就職先はなさそう。それに、そもそも子どもだけが楽しめば良いものなのだろうか、と自分の中で迷いも出てきました。周りの友達が大手ゼネコンやハウスメーカー



大学2年生の時、理工学部テニス部の大好きな仲間や先輩たちと。みんながいたから頑張れた。上段左から2番目が内山さん。

を志望している中、自分はこの分野で活躍できるのだろうか、と焦りも感じていました。不安になったらすぐ先生に相談していましたね。八藤後先生や中田先生からはいつも冷静にアドバイスをいただき、お話の後にはいつも前向きに行動できました。また、研究室の先輩にエントリーシートの添削をしていただいて、おかげで的確な自己分析もできました。友達もみんな意識が高く「自分も頑張ろう！」と思えました。辛い時に話を聞いてもらった時は安心して泣いてしまうこともありましたが、こういった支えが無ければ就職活動は乗り切れなかったです。

いろいろと考えていく中で、子どもはもちろん、たくさんの人が快適に過ごせるという条件に加えて「その土地の材料を使い、その場所の風土に合った建築を、その地域に住む人達の手と風習でつくる」ということも大切にすべきだと気づきました。そこで注目したのが地域参画、コミュニティデザインといった言葉でした。そう

いった考えが将来に結びつき始めたのは、遊具・公園づくりという分野も面白けれど、もう少し広い視点を持ってみようと思いはじめた頃でした。

そんな時、ある説明会で、建設コンサルタントの会社に出会いました。その会社は主に行政を相手にインフラ形成をしているのですが、その領域は地域参画や地域活性化などのソフト面にも派生していました。土木寄りの仕事だからこそ、建築や人間工学といった細部の観点も活かせるのではないかと考えたのです。今はその建設コンサルタントでまちづくりグループに配属され、地域参画にも携わっています。地域参画のプロジェクトでは、土地を愛する人達によるアイデアと設計で、地元の竹やワラ・木材を使い、地域に住む方々が協力して“古代住居風東屋”をつくるイベントの運営などに関わっています。大学時代に考えていたことが、目の前で繰り広げられていて、とても感動しています。

10年後は建築士になって、いろんな地域の人もものづくりができるようになりたいです。入社当時は建築士を取るつもりは無かったのですが、地域参画のプロジェクトを通して、「自分が地域にぴったりのものを設計して、それをたくさんの人と一緒につくりたい！」という思いが強くなりました。就職活動の時には迷いもありましたが、自分のやりたいことが就職を通してはっきりしたものになったような気がします。こだわりすぎず、自分が今できることとやりたいことのバランスを取りながら、ゴールを探して行きたいです。



地元の人が設計した古代住居を、地域の方々や大学生を交えて制作。古代住居の藁葺きの一部ができた時の記念写真。左から3番目が内山さん。

1  
years  
since I graduated.

# “迷ったらすぐ、先輩、先生、両親に相談してみて!”

OB/OG no.9

## 落合 涼子

2010年大学院修

/空間構造デザイン研究室

→エンジニアリング会社勤務

3 年生で専門が分かれる時、私は構造・環境コースを選びました。構造系の研究室は材料や鉄骨といった、ひとつのテーマを専門的に研究しているところが多かったのですが、何らかの形で“デザイン”へ関わっていきたいという気持ちと、自分の手を動かしてものをつくっていききたいという想いがあり、空間構造デザイン研究室を希望しました。研究室では“力学的に決まる形＝構造”を建物自体のデザインに活かす研究を多く扱い、実際に自分で仮設の作品を建てるなど、自由度が高く幅広い研究に取り組んでいました。

3年生の時、大学院進学が就職かを迷いました。進学するにせよ最終的には就職活動をするようになるのだからと、セミナーなどに参加するようにしていたのですが、その時はまだ自分が社会に出て仕事をしている姿を想像ができず、活動に身が入りませんでした。大学院に進学してからも、将来の仕事を決め切れなかったため、先生や先輩に色々相談をしていました。

こういう悩みは頭で考えていても何も解決しない!と思い、当時掲示板に貼ってあったインターンシップの案内を見て、実際

に企業で2週間の職場体験をしました。聞いたことがある程度の会社だったのですが、実際に仕事をさせていただくと本当に風通しのいい会社で、社員の方がとても温かい方ばかりでした。インターンシップに参加することで、この会社で働きたいと思うと同時に、自分のやりたいことも明確になりました。

私は働く環境を重視していたので、会社の社風を重点的に見るようにしていました。また、構造設計という職種を希望していたのですが、ビルや学校など一般的な設計をしている会社はたくさんあっても、研究で取り組んでいたようなスタジアムやタワーといった“構造がデザインに直結する建物”の設計に携われる会社は少なかった。その中で、特殊鉄骨分野の設計ができる新日鉄住金エンジニアリングを選びました。

入社してから約2年半は構造設計室という部署で、鉄骨造の倉庫や小規模な事務所を設計していましたが、1年前に免震震動装置営業室へ異動し、現在は免震や制振建物に使われる製品をPRする“技術営業”を担当しています。ここではお客様が設計者、つまり設計のプロの方なので、専門的な知識が無いとなかなか難しい職種ですが、過去の構造設計の知識を活かし日々業務に取り組んでいます。

10年後は、仕事と家庭を両立させている“働くお母さん”になりたいですね。まだ子どもはいないのですが、結婚をして



毎年学祭の時に行われているイベント「習志野ドーム」建て方にて。

から「両立」は難しいかも、と悩むこともありましたが、大学院まで進んで学んできたことや、これまで築いてきた人とのつながりなどを思うと、少しでも自分の能力を活かしてお世話になっている方々へ恩返しをしていきたいという想いが強くなっています。今は、子育てしながら働く環境が整ってきているので、そういった制度も充分に利用して今後社会に出る女性に対し、少しでも希望を与えられたらと思います。

学生の皆さんは、将来のことを自分ひとりで悩んでいてもなかなか解決の糸口が見つからないと思います。そんな時は、ぜひ大学の先生や先輩、ご両親に相談してみてください。能力に年齢は関係ないこともあります。人生経験豊富な方にしか分からないこともたくさんあります。それらは経験してみないと自分では知りえないことだと思います。みなさんの周りには協力してくれる温かい方々がたくさんいると思いますので、どんどん頼ってみてください!

4  
years  
since I graduated.



現在、配属されている免震デバイス営業部にて。免震装置や制振装置の模型の前で撮影。



あきらめず地道に努力を続けることでいつか必ず結果は出る

齋藤賞

床衝撃時における乾式二重床構造の伝達加振力の予測計算方法

田中 元規くん (M2・建築音響研究室)

**近**年、RC系集合住宅の床仕上げ構造として乾式二重床構造が多く採用されている。乾式二重床構造とは、コンクリートスラブ上に高さ調節可能な脚を設置し、その上にパーティクルボードやフローリングなどの木質系材料を施工するもの。床下にできる空間を設備配管などのスペースとして有効活用でき、建築的利点の多い床構造として用いられている一方、衝撃力が多点分散し、複雑な振動系が構成されるため、二重床の衝撃音遮断性能は、スラブ素面に対して1~2ランクほど低下し、有効な対策法や精度の良い予測法

を確立することが難しい状況にあった。そこで田中くんは、二重床による衝撃力の伝達経路を支持脚系と床下空気弾性系として、二重床の仕様から衝撃時にスラブの各位置に入力する支持脚加振力及び空気加振力を推定することで、下室に発生する衝撃音レベルの予測計算を試み、精度の良い衝撃音予測計算法の提案を行った。

「思うような結果が出ず悩むこともありましたが、自分自身で新しい解答をつくり上げるこそが、研究活動をする上での一番のやりがい、楽しさだと感じました。」



基本的なことから理解していくことで知識が深まる楽しさ

齋藤賞

コンクリートポンプ工法におけるコンクリートの品質変化および管内圧力に関する研究

宮田 敦典くん (M2・材料施工研究室)

**鉄**筋コンクリート工事は、鉄筋工事・型枠工事・コンクリート工事の三位一体の工事。このコンクリート工事において、生コン工場からトラックアジテータ(ミキサー車)で運搬されてきたコンクリートを現場内で打込み箇所まで運搬するコンクリートポンプについて、宮田くんは研究した。日本に普及し始めてから、材料施工研究室で研究され続けているテーマのひとつでもある。今回は、コンクリートポンプを使用する上で重要なコンクリートの品質変化と管内圧力の挙動を明らかにするために、1990年から2013年ま

でに発表されたコンクリートポンプに関わる文献645編の文献調査を行い、さらに、文献調査の傾向の妥当性を圧送実験によって検討した。

「合計645編の文献からのデータの読み取りは大変でした。実験データのグラフを一つひとつ読み取り、研究室の仲間にも協力を得ながら調査しました。大学院2年間で進めてきた研究を修士論文というひとつの形に仕上げることができた達成感、大きかったです。これだけのエネルギーをかけて何かを仕上げることがなかったので、今までとは少し違った感じです。」



一つひとつのことを突き詰めて、自分の軸をつくることから！

吉田鉄郎賞

徳川家光治世における社寺整備手法に関する研究

加藤 千晶さん (M2・建築史・建築論研究室)

**学**部の卒業論文で取り上げた、徳川家光造営の長谷寺本堂の研究を通じて加藤さんが知ったことは、家光は各所の社寺で、十分に使える年月の経たない建物でも一から造り替えていったことだった。これは家光政権が社寺造営を通じて威光を示していったためだったのではないが、その建築の見せ方がこの頃の空間構成につながっていったのではないかと考えるようになり、これまであまり日の目を見なかった近世社寺建築に光を当て、検証を進めることにした。

江戸期を代表する社寺建築は、徳川家光治世下

(1624-51) 造営のものが多く、その背景には家光による幕府の政策があった。しかし建築史研究では、幕府が社寺建築・伽藍に及ぼした影響を検証したものはほとんどなかった。そこで研究では5カ所の社寺を通じて、家光期の造営が建築・伽藍に及ぼした変化を、古図と作成した復元配置図によって一つひとつ検証していった。結果、造営を通じて日光東照宮造替に向けた空間構成手法の提案が行われたこと、その後の各地の東照宮普及に向けてモデルの提案を行ったことなど、次の建築史研究につながる成果を得ることができた。



## 関係発達論に基づいた小児病棟の設計

- 年齢により変化する対人関係に着目した聖路加国際病院における慢性期患児のための療養空間の提案 -

矢板 悟くん (M2・佐藤光彦研究室)

**昨**年、小児病棟に入院したことがきっかけとなり矢板くんは、子どもの療養空間に対して考え始めた。子どもたちはカーテンで仕切られた自分のベッドがある場所にだけ閉じこもり、他人と接点を持つことが自然と不可能な療養環境にいた。もっと子どもたち、患者側の心理に焦点をあてた療養空間があるべきではないだろうか。そこで、子どもが他者との関係性の中で成長するとした考え(関係発達論)を基に患児同士の関係性から長期入院患者のための小児病棟を設計することをテーマとした。子どもは年齢によって必要

な空間や人間関係が変化していくが、現状の病室ではベッドは変化していくものの、部屋自体が変わることは無く、他の患児との距離は一定となる。そのような現代の病院に対し、患児が他者との距離感を調整することができる療養空間を設計することで、子どもたちが自主的に他者との関係の中で居場所を見つけることができる病棟を目指した。通常の部門別面積比率などの全体性から計画される病院建築ではなく、人の関係という最も小さな単位の部分から設計し、全体を構成することで新たな療養空間のあり方を提案した。

図



## 床仕上げ材の違いによる歩行感覚評価の検討

榎本 巽くん+庄司 綾さん (4年・建築音響研究室)

**現**在、集合住宅の増加と共に各住戸の独立性や住空間の快適性向上が求められている。中でも住宅の床は人が常に触れる部分であるため、歩きやすさ、安全性、衛生性など多くの性能が要求される。そこで榎本くん、庄司さんの研究では、床仕上げ材の違いが歩行時における足裏のかたさ感覚や好ましさを評価にどう影響するのか検討し、特に床仕上げ材の感触(テクスチャー)に着目した。具体的にはかたさを感じた足裏の部位別比率を求め、評価方法として不快さにも着目し、室用途を想定して評価してもらうことで、各

室用途に適した床材の検討を行った。また床に対する要求性能に関するアンケートを行い、現在使用している床と求められている床の傾向を知り、室ごとに重要視すべき人の動作を検討することで、床の総合性能の向上を目指した。(写真:歩行感覚評価実験)

「実験機器の設置や使用は初めてだったので上手くいかないことも多く、試行錯誤を重ねました。けれども、多くの時間を研究に費やすことで、よくわからないものがより明確になっていく。そこに楽しさを感じました。」(庄司)

図



## ケーブルを用いたスポークホイール型観覧車の基本的構造特性に関する研究

宮本 悠平くん (4年・空間構造デザイン研究室)

**遊**戯施設を含む高さ60mを超える建築物に対して2000年の基準法改正に伴い、大臣認定が必要となった。そのため、時刻歴応答解析を用いた地震動に対する検討は欠かせない。特に2001年以降、大規模な観覧車は建設されていないのが現状である。

そこで自転車の車輪の構造を用いたスポークホイール型観覧車に着目して基本的構造特性の把握を行った。この観覧車は従来の観覧車と比べ、少ない部材量は経済的であり、風に起因する投影面積は小さく、スポークとリムによる構造的合理性

は日本で有効であると考えた。研究として模型による静的載荷実験や時刻歴応答解析を含んださまざまな解析を行い、結果リムの崩壊は面内方向の曲げモーメントに依存し、スポークの本数が多いほどスポークの軸力抵抗系に、少ないほどリムの曲げ抵抗系となることがわかった。

「研究室の人たちと苦楽を共にした日々は、今思うと良い思い出です。設計も論文も関係なく、どちらも『自由』に考えることが必要だと思います。自分でテーマを探して、問題と解答を自分なりの吟味が、結果につながりました。」

図





1年の研究が、1冊の本に、これだけやったという嬉しい実感

桜建賞

試験方法の違いによるコンクリート供試体の体積のばらつきに関する一考察

田部 菜津子さん（4年・材料施工研究室）

**硬** 化したコンクリートから作製に用いた材料の量を逆算し、調査表と比較する研究。田部さんは、先生が学生時代に行っていたこの研究を発展させるべく、より精度を上げるにはどうしたら良いのかということに取り組んだ。これまでの研究を調査すると、実験において誤差やばらつきを検討は行われていたので、検討例が無かった実験に用いられる試料の調整段階や供試体の体積の測定方法に着目した。さまざまな試験を行う過程において円柱供試体の体積や密度を測定、算出するのだが、測定方法の違いや供試体表面の凹

凸、供試体の吸水状態などによってばらつきが生じる。そこで、より精密な結果を得られるよう測定方法を検討した。検討には生コン工場や自分たちで作成した供試体（写真）全377本を各条件で分類し、条件によってどの試験方法を用いるべきなのかについて比較した。

「寒空の下での供試体の測定や膨大なデータの整理は、とても大変でした。新たな分野を検討するのはすごく難しいことですが、自分の中で少しずつできることが増えていくにつれ、新しいことを知る研究の楽しさを自然に感じることができました。」



自らやりたくなるような研究テーマを見つけよう！

桜建賞

家具デザイナー・水之江忠臣のデザイン活動に関する研究

一戦後日本の家具デザイン史における位置づけ

出口 順平くん（4年・建築史・建築論研究室）

**卒** 業研究では家具を取り上げよう。出口くんは、ずっとそう考えていた。そのことを大川先生に相談した時、たまたま前川建築設計事務所から先生宛に届いていた1枚の資料が、家具デザイナー・水之江忠臣（1921-77）のものであった。自分のやりたいテーマの資料が目の前に現れて驚いたという出口くんは、そのまま水之江忠臣を研究の対象とすることとした。

水之江忠臣は日本大学の卒業生であり、前川國男設計事務所の家具部門を担当していた人物。これまででは建築家とコンビを組んだ家具デザイナー

の先駆者として紹介されることはあっても、水之江の略歴、家具作品、デザイン活動などに関する発表はまだされていなかった。そこで出口くんは、水之江の家具の設計活動、執筆活動、展覧会といった戦後の活動を分類してまとめ、水之江のデザイン活動とその特徴を明らかにした。

「書籍を手がかりに、人や企業へ電話をかけ情報を集めました。最終的に水之江のご子息と会うことができ、資料をもらうこともできたんです。卒業論文に毎日取り組んでいると少しずつ成長していく自分に少しだけ自信が持てるようになりました。」



世に役に立つかもしれないものを完成させたときの達成感

桜建賞

「サブリース事業」による歴史的建造物の空き家活用に関する研究

田中 悠貴くん（4年・川島研究室）

**田** 中くんは、小さい頃から好きだった日本の古いまちなみを卒業研究のテーマとした。古いまちなみを残すためには建物のハード・ソフトを一体的に考え整備することがポイントになるのではないかと、具体的な研究テーマを模索していたところ、サブリースという方法による歴史的建造物の活用を知り、研究対象とすることにした。

サブリースとは事業主体が所有者から建物を借り、それをテナントなどに貸し出す事業のことを言う。特に長期間のサブリースは短期間のものに比べ、歴史的建造物の修繕などのハード整備とテナント内

容の選定などのソフト整備を一体的に行うことができ、効果的なまちなみ整備が行えるとされる。そこで田中くんは、全国の事例をリサーチし（写真：犬山市本町通のまちなみ）、長期的サブリース事業において歴史的建造物の長期的活用につながる要因を明らかにし、事業主体が留意しなければならない点や課題を挙げ、その上で提言を行った。

「好きなことを徹底的にやれるのはきつと学生の間だけ。自分の興味のあるテーマを自分で解決した結果、ほんの微力ながらも誰かの役に立つことができた。その点が卒論の楽しさだと思いました！」





## 在り触れる美術館

小笠 舞穂さん（4年・佐藤慎也研究室）

「アートは日々日常に近づいてきているのに、それを受け止めるはずの建築は、“まちに開くよ”“敷居を低くしたよ”と謳いながら非日常空間であることを捨てられていない」そこで小笠さんは、非日常を捨てて、私たちにとって普通に日常の中の一部であるような場所が、気づいたら美術館になっている、そんな建築をつくることはできないだろうか考えた。

敷地を大規模な開発が進んでいる中野駅北口を選び、そこに移動式展示室のシステムとその展示室、基地、ターミナルを設計し、アートハブにす

るとい計画だ。トラックの荷台のモジュールを用いた展示室は、バス経路を利用して中野区の町へ飛び出し、活動を終えた展示室は、駅前広場のハブへ戻ってくる。そしてまた別の場所へ飛び出していく。こうして何年か先に、アートが日常の一部になった時に美術館と呼ばれる場所になる。これまでに無い新しい形の美術館を提示した。

「卒業設計は、自分のやりたいテーマや敷地を選び、自分が習いたい先生の研究室で、自分が頼りにしている後輩達に手伝ってもらいながらできる。そんな設計が楽しくないわけがありません！」



## 擁壁に関する研究 - 主働崩壊形状観察実験 -

太齋 光さん（短大2年・佐藤秀人研究室）

擁壁とは、切土などによる地表面の高低差を安全に保持するために、その境界に設けられる壁状の構造物。国土が狭く平野部の少ない日本では、敷地の有効利用のために擁壁を使用して宅地造成をすることが多い。近年、大地震や台風、また施工不良などで崩壊する地盤が目立つ中、その役割を大きくしつつある擁壁に興味を持った太齋さんは、より詳しく地盤のメカニズムを知りたいと思い、今回のテーマに取り組んだ。

具体的には、擁壁に関する基礎事項を把握するために行った資料調査と、設計外力である主働土

圧についての理解を深めることを目的とした崩壊形状観察実験を行った。実際の地盤内部を目視観察することは難しいため、その挙動を表現するために、さまざまな素材で試行錯誤した。結果、太齋さんは、なんとストローを積み重ねたもの（積層体）を模型地盤とし、それを主働崩壊させて積層体の挙動を観察する実験を行った。

「長時間にわたる研究が完成した時は、達成感と解放感を感じました。実験を重ねていくと、新たな疑問も出てくるので、今回だけにとどまらず、これからも勉強して調べていきたいです。」



## PILLAR CHURCH - 海浜幕張カトリック教会 -

木村 肇くん（短大2年・田所研究室）

「従兄弟の結婚式での神秘的な体験が、今回のテーマに取り組んだきっかけだ」という木村くん。海浜幕張の臨海部に存在するQVCマリンスタジアムの隣にある東京湾に面した空き地を敷地として、カトリック教会を計画した。基本的な構成としては1階に主聖堂、告解室、香部屋、泣き部屋、少聖堂を配置、その他に12使徒をさまざまな場所に3人1組のユニットで配置した。12使徒がさまざまな場所に配置されることで、建物の色々な場所で人々が祈りを捧げることができる。2階はコミュニティセンターとなっており、図書

館やアートギャラリー、レストランなどの機能がさまざまな高さに配置されていて、建物の段差の隙間から1階の祈りの広場を見ることができる。

「卒業設計は全て自分で考えてやるというところが、一番難しく、一番楽しい部分だと思いました。今までの設計課題とは違い、自分が興味のあるものについて、自ら意欲的に学べるところが面白い。そしてブラッシュアップし続けて、最終的に形となった時の感動は忘れられません。建築についても知らないことが山ほどあることも痛感させられました。」



## 1 | 毎月開催、在学生も卒業生も、誰でも参加できる 新しいレクチャーシリーズ「オウケンカフェ」レポート

日大建築系すべての卒業生による会「日本大学桜門建築会」が企画してゲストを招くレクチャーシリーズ「オウケンカフェ」は、昨年7月から月1のペースではじまり、早くも7回目を迎えた。今回のゲストは、竹中司さん+岡部文さん（建築家/アンズスタジオ）。コンピューテーションと建築の設計、最前線で起きていることのプレゼンテーションは、設計にとどまらず材料、歴史、環境、構造といった建築の全分野に派生するもので刺激的でした。今回はM1の田崎敦士くんのレビューを掲載。4月以降も大学の授業ではカバーできないさまざまなゲストを迎えます。とにかく刺激的なので、学生の皆さんも先生方も、ぜひ気軽に参加を！

\*facebook URL : <https://www.facebook.com/okenkai>

\* 毎回 19 時スタート。場所は、駿河台キャンパス5号館5階スライド室1。参加費は、桜門建築会会員・日本大学学生は無料。会場ではキャッシュオンにてドリンクを販売します。

\* これまでもさまざまなゲストをお迎えしてきました。

大西正紀（編集者）+田中元子（ライター）/mosaki、古澤大輔+馬場兼伸+黒川泰孝（建築家 / メジロスタジオ）、中崎透（アーティスト）、小川博央（建築家/小川博央建築都市設計事務所）、今村雅樹（日本大学理工学部建築学科）+小泉雅生（建築家）+高橋晶子（建築家）、竹中司+岡部文（建築家/アンズスタジオ）、末光弘和（建築家/SUEP.）、星野諭（プレイワーカー・地域コーディネーター/コドモ・ワカモノまちing)

! "# \$ % / & ' ( ) \$ ( \$ & \* + , - . \$

ゲスト：竹中司さん+岡部文さん（建築家/アンズスタジオ）

| 田崎敦士（M1 / 佐藤慎也研究室）

コンピューショナルデザインは、あらゆる環境を定量化し、それらを総合的に解析するアルゴリズムの実装によって、不確定で不明瞭な領域に足を踏み入れていくものですが、今日の建築業界では最終的な結果物にしか目が向いておらず、二項対立的な議論に陥りやすい風潮があるように感じています。

これは、設計のプロセスに如何にして他者性の介入を許すかという問題に接続し、デザインの領域の中でも、より複合的な建築の分野において、積極的に議論をしていく必要があるのではないのでしょうか。


アンズスタジオのコンピューショナル・デザインは、全体のアルゴリズムの中に、段階的に自分たちの選択（好き/嫌い/綺麗/汚い/とか）の場を設けることで、

形態に恣意性を漸次的に擦り込ませていくようなもので、どこか人間味を感じることがができます。また、そこで用いられるパラメータは、自らのリサーチによるものや、様々な専門家が時間をかけて解析した結果によるもので、定量化された〈合理性〉と、それぞれが解析にかけた時間と苦勞の〈情熱〉による異なる性質の他者性が介在していました。そういった意味では、コンピューショナルデザインとは、設計プロセスに他者性、そしてそれぞれの主体性を内包することができるとも言えそうです。

一方、デジタルファブリケーションの実践では、コストを上げないで少量多品種生産を実現するためにはどうすればよいか。設計で用いたプログラム言語を、施工ロボットが読み込める言語に変換し、設計と施

工を交互にフィードバックさせながら計画していく、さらに、施工方法を開発し、オリジナルの金物や工具をつくり出すなど、コンピューショナルによって得た形態をどう施工するのかについて、非常に示唆的な内容でした。

設計と施工の新たな方法と関係を生みだし、建築家の職能を拡張していくアンズスタジオのレクチャーは、私達の世代が考えるべき多くのテーマが含まれていた内容でした。

情報量が多くなかなか消化しきれいてませんが、とても面白いレクチャーをしてくださったアンズスタジオと、その機会を設けてくれたオウケンカフェに感謝したいと思います。ありがとうございます。 



## 2 | 2014 年度、人事のお知らせ

### ★建築学科人事

・4月1日付の人事で、田嶋和樹助教、富田隆太助教が准教授に、石鍋雄一郎助手が助教に昇格した。横河健教授が、新たに特任教授として建築学科所属となり、引き続き学生の教育・研究に携わる。

・4月1日付の人事で、田所辰之助教授が短期大学部建築・生活デザイン学科より異動した。また、廣石秀造助手が短期大学部建築・生活デザイン学科に異動した。

・4月1日付の人事で、新しく建築学科のメンバーになったのは、柘田吉弘特任教授、宮田敦典助手である。

・末岡佐江子助手、西脇梓助手が3月31日をもって退職した。

・建築学科の非常勤講師の新旧交代は以下の通り（敬称略）。

〈**新任**〉伊藤暁（建築設計Ⅰ・Ⅱ）、小川博央（建築設計Ⅱ・Ⅲ）、粕谷奈緒子（デザイン基礎、建築設計Ⅰ）、木田悟（地域開発計画）、佐藤晃紀（鑑定評価理論Ⅰ・Ⅱ）、関谷和則（建築

設計Ⅳ、設計演習Ⅲ）、西澤徹夫（建築設計Ⅰ・Ⅱ）、福島加津也（建築設計Ⅲ・Ⅳ）、福西浩之（建築設計Ⅳ）

〈**退任**〉石黒由紀（建築設計Ⅳ・Ⅴ）、関野宏行（建築設計Ⅳ）、関本竜太（建築設計Ⅱ・Ⅲ、設計演習Ⅰ）、納谷学（建築設計Ⅲ・Ⅳ）、水野吉樹（建築設計Ⅳ）、柳澤力（建築設計Ⅴ・Ⅵ）

・建築学専攻の非常勤講師の新旧交代は以下の通り（敬称略）。

〈**新任**〉末光弘和（建築デザインⅠ）、長沼一洋（建築構造解析特論）、羽鳥達也（建築デザインⅠ）、福山博之（建築デザインⅠ）、細澤治（建築構造計画演習Ⅱ）

〈**退任**〉赤松佳珠子（建築デザインⅠ）、西沢大良（建築デザインⅠ・Ⅱ）、水野吉樹（建築デザインⅡ）、柳澤力（サスティナブルデザイン特論）

### ★短大建築・生活デザイン学科人事

・4月1日付の人事で、矢代眞己短大准教授が教授に、酒匂教明専任講師が准教授に、星和磨短大助手が助教に昇格した。

・4月1日付の人事で、廣石秀造短大助手が、

理工学部建築学科より異動した。また、田所辰之助短大教授が、建築学科へ異動した。

・4月1日付の人事で、新しく建築・生活デザイン学科のメンバーになったのは、高安重一助教である。

・4月1日付の人事で、羽入敏樹短大教授が建築・生活デザイン学科長となった。

・小石川正男短大教授（学科長）、黒木二三夫短大教授が3月31日をもって退職した。なお、小石川正男短大教授は、「建築デザインスタジオⅡ・建築デザインスタジオⅢ」の講義を、黒木二三夫短大教授は、「建築基礎実験Ⅰ、建築生産実験、建築各種構法、建築力学Ⅰ、建築力学演習」の講義を引き続き非常勤講師として担当する。

・短大建築・生活デザイン学科の非常勤講師の新旧交代は以下の通り（敬称略）。

〈**新任**〉篠崎隆（建築・生活デザインの基礎、建築デザインスタジオⅠ）、小島陽子（日本・アジアの建築史）、宮崎渉（建築計画の基礎・建築計画Ⅰ）

〈**退任**〉内藤正昭（建築生産実験）

## 3 | 受賞・論文掲載

### ★論文掲載

・羽入敏樹短大教授、星和磨短大助教、渡辺大助（ミサワホーム総合研究所）の共著による論文「吸音による住空間の音環境快適化のための聴感実験方法」が、日本建築学会環境系論文集 第78巻 第696号（2014.2）に掲載された。

・羽入敏樹短大教授が、日本音響学会の「環境音響研究賞」を受賞した。同賞は、環境音響学の発

展に貢献した、主として建築音響分野又は騒音分野に関連する一連の研究を行った研究者に授与される。受賞対象は「室内音場の方向情報の主観評価と音場拡散の枠組みに関する研究」で、コンサートホールや劇場等の建築音響設計の発展に寄与する研究成果として評価された。

### ★受賞

・「第2回大東建託 賃貸住宅コンペ」（主催／大

東建託）において、山井翔太くん、奥富大樹くん（山中研 M1）、杉本将平くん（2011年度卒／工学院大学大学院）による「借具のある暮らし」（左写真）が審査員特別賞、森田秀一くん、小杉真一郎くん、宇田百孝くん（3年生）による「私から大家さん、そして都市へ」（右写真）が学生特別賞を受賞した。コンペのテーマは「新たな賃貸を考える」。建築家の小泉雅生氏、五十嵐淳氏、鍋島千恵氏らが審査員を務めた。新たな「賃貸住宅」を考えるというテーマに対し、557点の応募があった。



## 4 | 2014 年度、新任教員の紹介

### [ 建築学科 ]

#### 田所 辰之助 (たどころ・しんのすけ) [教授]

4 月から建築学科へ移籍となりました。ひきつづき「建築デザインと歴史」や新たに「建築保存修復学特論」(大学院)、設計では 2 年生の「建築設計 II」を担当させていただきます。専門は建築史で、20 世紀初頭のドイツの近代建築をテーマにしています。ミースやグロピウスが活躍した時期に先んじる、第一次大戦前のヴァイヘルム帝政期と言われる時代がテーマです。

ある先輩の建築史家に、「この時代の建築を語る言葉がないんだよな〜」と言われたことがあります。時代や社会との関わりを読み解きながら、建築家やその作

品を語る言葉を発見していくこと。歴史を研究することの意義のひとつが、ここにあるのかもしれない。言葉が見つければ、歴史はたんなる過去の話ではなく、現代の建築創造のありかを照らし出す灯火になってくれます。

建築を取り囲む状況を読む目、それを表現行為に変えていくしなやかな感性がこれまで以上に必要とされる時代になっていくことでしょう。みなさんと対話を積み重ねながら、新しい言葉を見つけていけることを楽しみにしています。



1962 年、東京都生まれ。1986 年、日本大学理工学部建築学科卒業。1988-89 年、ダニエル・リベスキンド主宰アーキテクチュア・インターナショナル(ミラノ)に参画。1994 年、同大学院博士後期課程単位取得退学。1997 年、博士(工学)(東京大学)。1996 年、日本大学短期大学部建設学科助手を経て、2013 年より同建築・生活デザイン学科教授。



左: 京都国立近代美術館で開催された「クッションから都市計画まで ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟: ドイツ近代デザインの諸相」展の企画に参加し、図録に寄稿しました。ドイツ工作連盟の再読を試みて、世界的にもその先駆けとなった展覧会でした。

中: 東京大学出版会から刊行された論集「シリーズ 都市・建築・歴史」全 10 巻の第 9 巻『材料・生産の近代』に「デザインの誕生—工芸への批判的距離」と題した論文を執筆しました。「デザイン」とは形態の発明ではなくシステム刷新であることを、ペーレンス、ムテジウスなどの建築家を題材に記しました。

右: 本学でかつて教鞭を執った建築家吉田鉄郎の著書『日本の住宅』(鹿島出版会)。もともとドイツ語で書かれた本で、その翻訳を担当しました。故近江崇先生、大川三雄教授との共著です。『日本の建築』『日本の庭園』と合わせ三部作をなし、伝統的な日本建築の真髄をとともわかりやすく解説しています。ぜひ、目を通してみてください。

#### 榎田 佳寛 (ますだ・よしひろ) [特任教授]

卒業研究に就くために構造の研究室を訪ねたとき、先生から「コンクリートの研究が大事だよ」とのご助言をいただき、コンクリートの研究室に入ることになりました。それ以来、コンクリートの研究に携わって 4 2 年になります。4 年生のときに国家公務員試験に合格し、大学院(修士)修了後に建設省建築研究所に行くことになりました。修士論文は「コンクリートの硬化過程における熱伝導性に関する研究」です。この研究の中で物質やエネルギーの移動現象を解析するための拡散方程式を勉強しました。建築研究所での最初の課題は「コンクリート

の早期判定基準」です。この研究では早期強度と 2 8 日強度の関係についてのデータがあるとき、判定線をどのように引くのが良いかという問題に対する答えを与えるもので、確率・統計の勉強をしました。その後、建築研究所、宇都宮大学において構造体コンクリートの研究、塩害・中性化による鉄筋コンクリートの劣化とその対策に関する研究などを行ってきました。今回、縁があつて日本大学に来ることになりました。これらの経験を生かして皆さんにコンクリートの研究の大切さ、楽しさを伝えたいと思います。



1970 年、東京工業大学理学部数学学科卒業。1973 年、東京工業大学工学部建築学科卒業。1975 年、東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了。1975-1995 年、建設省建築研究所。1982 年、工学博士(東京工業大学)。1995-2004 年、宇都宮大学教授、工学部。2004-2013 年、国立大学法人宇都宮大学教授、工学研究科。2013 年、宇都宮大学名誉教授。



左: 「良好な鉄筋コンクリート造建築物を造るために 構造体コンクリートの研究」(著: 榎田佳寛 / セメントジャーナル社 / 2013)  
右: 「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事 2009」(日本建築学会)

#### 宮田 敦典 (みやた・あつり) [助手]

この春より建築学科の助手を務めさせていただくことになりました宮田敦典です。本学で働く機会をいただき大変嬉しく思います。

私は、学部 3 年生の時に施工分野に興味を持ちました。4 年生の春から中田研究室(材料施工研究室)に所属し、卒業研究を進めていく中で、研究の面白さを

知り大学院への進学を決めました。研究室に所属してから 3 年間、コンクリート工事の施工に関する研究を進めてきましたが、今後さらに研究に励んでいきたいと思っています。これから先生方や学生の皆さんと接していく中で、日々自分自身を高めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



1989 年、埼玉県生まれ。2012 年、日本大学理工学部建築学科卒業。2014 年、日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(中田研究室)。

## [ 短大建築・生活デザイン学科 ]

### 高安重一 (たかやす・しげかず) [助教]

大学の助手時代は多くの建築家の先生と設計の授業に参加し、研究としては思考のブラックボックスのようなエスキスプロセスを扱っていました。それと並行して研究室での設計活動を行っていた5年間でした。

この教育・研究・設計という3本柱は、設計事務所を始めてからも継続したいと思っていたところに非常勤講師のお話をいただき、18年間学生の設計の現場を見ることができました。テーマとしていたエスキスプロセスの研究は「設計初学者がどのように

したら設計がうまくなるか？」という目的がありましたから、たくさんの学生の設計を間近に見られたことは大変参考になりました。そして初学者にはテクニックはもちろんですが、モチベーションを保ち続けることの重要性も学びました。

今年度より短期大学部に着任いたしますが、デザインに係り始めるこの2年間はまさにこのモチベーションを生み出すことに力を注ぎたいと思っています。



1966年、千葉県生まれ。1989年、東京理科大学理工学部建築学科卒業。1990年、東京理科大学助手。1995年、建築研究室高安重一事務所設立。2003年、有限会社アーキテクチャー・ラボ代表取締役。東京理科大学、明治大学、日本大学などで非常勤講師。



上：「東京理科大学コミュニケーション棟」学生のための福利厚生施設。学内通路に面しているため、どこからでも入れるような入り口のたくさんとれる構成とした。自立した壁は内部にも繰り返され、食堂・ホール・店舗・中庭などのスペースが次々と展開していく。

左下：「4連の家」屋根を4分割してつなげたような外観は、大きな住宅を周辺になじませるための形。しかし内部空間は一体化されており、四連のギザギザ屋根の下は住宅のメインスペースとなる。面積は大きな住宅だが、寸法を少し小さめの設定としているので、親密な空間に感じられる。

右下：「いづみ保育園」西新井駅近くの新市街と旧市街のエッジに建つ3階建ての保育園。これからの街の変化と共に、保育をめぐる社会状況の変化をも受け止める作りとした。結果、厚いコンクリートの壁で包み込む構成を採用した。内部では耐力壁が必要なくなり、外から守られたフレキシブルなスペースが生まれている。また、半外部空間（緑側や屋外階段）も内包しているため、子どもたちは以前の園舎のように保育室に直接登園できる。

### 廣石 秀造 (ひろいし・しゅうぞう) [助手]

今年度より短期大学部所属となりました廣石秀造です。私は大学院を修了後、構造設計を専門とする設計事務所を経て、2011年より昨年度まで理工学部建築学科に所属しておりました。専門は、膜やケーブルなどを使った空間構造、および木質構造です。

「構造」というと苦手意識を持つ人がいるかもしれませんが、建物の構造は地震などの外力に対して安全性を確保するというのが一番の使命ですので、建物が壊れないよう必要な材料、断面などを計画する必

要があります。しかし、この計画には多くの選択肢があり、構造に対する知識は選択肢の幅を大きく広げてくれます。それはもちろん意匠や環境、コストなどにも大きく影響しますし、構造設計によって全く異なる建物ができる可能性がありますので、実は非常に面白い分野です。

皆さんが少しでも構造に興味を持ってくれるように、お手伝いをしていきたいと思っています。よろしくお願いたします。



2007年、日本大学大学院理工学研究科建築学専攻（斎藤・岡田研究室）修了。2007～11年、(株)構造計画プラスワン。2011～2014年、日本大学理工学部建築学科助手。



左：著書「絵でみるちからとかたち」。岡田章教授と共に執筆した本。建築構造のしくみについて、絵や写真を通じてわかりやすく解説する1冊となっています。

右：U字型コースターの振動実験。岡田章教授、宮里直也准教授、秦一平准教授と共に遊戯施設の設計法に関する研究を行っています。U字型コースターに台車を載せて振動台にて加振することで、台車の及ぼす影響の把握を試みた実験。

毎号、一枚の建築写真！

# A Photo of World Architecture vol.08 Abeno Harukas

**20**14年3月7日、日本の高層ビルに新チャンピオンが誕生となりました。その名も「あべのハルカス」（大阪市阿倍野区）。スペックは、高さ300m、延床面積21万2,000㎡、地上60階・地下5階。低層階には近鉄百貨店と美術館、中層階にはオフィス、高層階にはホテルや展望台が入っています。

特に百貨店には、コミュニティデザイナーの山崎亮さんが代表を務める studio-L の監修によって、店内に8か所にあるコミュニティスペース「街ステーション」が設けられていて、ここでは市民活動団体が、「緑活」というプログラムを展開していくのだそう。これまでにない新しい形の商業施設として注目されています。

さて、この建物。計画当初は、航空法の高さ制限で270m前後の高さを予定していたんだけど、2007年の航空法の改正で制限がなくなって、急遽、日本一の高さのビルを目指すことになったんだって！

全面をガラスで覆うカーテンウォールでつくられた外観デザインは、マレーシアの「ペトロナスタワー」（1998）など、世界中に数々の超高層建築物を設計する超高層マイスター建築家、シーザー・ペリの監修によるもの。建物の設計は竹中工務店。写真を見てもわかのように全体は3段階にセットバックする立体構造。各段階の屋上には緑地空間が設けられていたり、建物内部には吹き抜け空間を利用した「光と風の道」をつくることで、エネルギー消費量を低減するなどの環境対策も取られているそう。

まあ、とにかく見どころ満載の巨大ビル、大阪へ足を運んだ時は、是非立ち寄ってみましょう。さて、ここで問題です。つい先日まで高層ビルのチャンピオンだった関東にあるビルの名は？ ■

(photo=J.o.)

# Contents

- 02 **[SPECIAL FEATURE]**  
あれから〇年 卒業生たちの今
- 14 **速報！ 2013 年度に受賞した  
修士論文・設計 & 卒業研究・設計12**
- 18 **[NEWS & TOPICS]**  
オウケンカフェレポート  
2014 年度人事のお知らせ  
受賞・論文掲載
- 22 **[A PHOTO OF WORLD ARCHITECTURE]**  
vol.08 Abeno Harukas
- 24 **[EVENT REVIEW]**  
mosaki のイベント巡礼 vol.8  
「青豆ハウス おひろ芽マルシェ」

## SUNKEN

「駿建」

発行日：2014 年 4 月 1 日

発行人：岡田章

編集委員：佐藤慎也・田嶋和樹・橋本修・長岡篤・古澤大輔・中田弾・山崎誠子・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀 + 田中元子 / mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台 1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：<http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

# event review

mosakiのイベント巡礼 vol.8

## 青豆ハウス おひろ芽マルシェ

2013年12月24日(火) ~ 28日(土) **会期終了**

### すくすく育て！「青豆ハウス」

♥ 最近ウワサになっている、ある建物でマルシェを開くってなので、早速行ってきたよ。

◆ マルシェ？

♥ うん。会場となったのは練馬区にある「青豆ハウス」。リノベーションを得意とするブルースタジオが設計した新築の賃貸物件で、メゾネットタイプの住戸が8戸入っている集合住宅なんだ。この共有部分に、ハンドクラフトや飲食物などのお店が出ていた。いやあ、感動したなあ！

◆ え、よく分からないんだけど。何に感動したの？

♥ だってさ、新築物件で飲食まで販売するな

なんてリスクのあること、普通あり得ないでしょ。

◆ それは確かにそうだね。

♥ マルシェ当日は、部屋の中まで見学できる、オープンハウスでもあったんだよ。しかも業界関係者だけでなく、街の人や私のような野次馬まで、老若男女みーんなに開かれたオープンハウスなの。

◆ リスクを冒してまでそんなことをして、誰にメリットがあるんだろう。

♥ 一番は、多くの人にこの集合住宅が持つ意図を、理解してもらいたいことじゃないかな。特に街の人にとっては、知らない人々が転居してくるわけだけど、それを気持ちよく受け入れるきっかけになっている。

◆ それはいいね。防犯の観点から何でも伏せがちだけど、ここでは完全に逆の方向をとったわけだ。

♥ こんなこと、小手先の企画じゃできないよ。建築設計の前段階から、ブランディングからマーケティングといった面から、きめ細かにストーリーが練られて。それが建物なイベントといった、かたちになっているんだよね。

オーナーである今話題の大家さん、青木純さんと、企画設計したブルースタジオが、本当にいいチームワークで実現させたんだと思う。

◆ 新築物件であるにもかかわらず、入居前からイベントの会場になって、多くの人に立ち入られるっていうことも、住民との信頼関係が無いと、できないことだね。普通の集合住宅と比べものにならないくらい、たくさんの時間と労力がかけられていると思うよ。実際、家賃は周辺の相場に比べて4割も高いんだけど、満室御礼だって。どんな箱に住むかより、どんな暮らしを、どんな人々と実現させていくか、そのためのどんなサービスを受けられるか、ということへの価値が理解された結果だね。

♥ 建築は使われ方で育てられるものだって言うけれど、そんなこと、建てっぱなしではなかなかうまくできないよね。いい使い方ができるように提案、誘導する、ソフト面の設計もまた大事なことだと、改めて考えさせられたよ。今後の行方も楽しみな建築だった。



おひろ芽マルシェ当日は、400人強の人々で賑わった。



建物全景。逆側では、空と畑が伸びやかに広がる風景が楽しめる。



壁の塗装は半分まで施工され、残りは入居者の手で行われた。色は入居者自身が選んだもの。

## Recommend | 2014年4月 - 6月

【1】「THE 世界一展 ～極める日本！モノづくり～」| 日本科学未来館 |

会期：2013年12月7日(土)～2014年5月6日(火)

世界でナンバーワン、オンリーワンの価値を持つ技術と文化が混在する日本。伝統とハイテク、美食やポップカルチャー、精巧で緻密、そしておもてなしの精神に富んだ「モノづくり」の数々。日本が生み出した宝物のような製品・技術、200点以上が一堂に会する会場で、日本の「モノづくり」とその歴史的・文化的背景を考える企画展。

【2】「第4回 LIXIL 国際大学建築コンペ 公開審査会」| 経団連会館 2F 経団連ホール(北) |

会期：2014年4月25日(金) 15:30～18:30(開場15:00※要事前申込)

北海道大樹町にある「MEMメドウズ」を敷地に、課題案に即した作品を、世界9カ国12校の招待大学から募り、一次審査を通過した上位3校による公開審査会が行われる。最優秀賞に選ばれた作品は、昨年の受賞校(ハーバード大学(アメリカ))と同様に、建設までを行う。審査委員長は、建築家の隈研吾さん。実施コンペの公開審査をまだ体験したことのない人は是非、足を運んでみよう。

【3】「乾久美子+東京藝術大学 乾久美子研究室 展—小さな風景からの学び」| TOTO ギャラリー・間

会期：2014年4月18日(金)～6月21日(土)

研究室の学生や事務所の所員らと共に行ったリサーチを紹介。半年以上をかけて、延べ45都道府県、約200を超える市区町村を取材する中で撮り続けた風景の写真、その総数は約18,000枚！それらを類型学的に分類していく中で見出された視点を加えて分析した。会場では、類型化の過程で導き出されたキーワードである「サービス」という切り口で選ばれた約2,000枚あまりの写真を178ユニット(写真群)に層別して紹介する。

## [ 編集後記 ]

誰しもが体験する社会へ出ることの不安感。それはいったいどこから生まれてくるものなのでしょう。これは裏を返すと、あまりにも自由、選択肢が無限大なのだからかもしれませんね。しかも、自分の将来は、誰が決めてくれるわけでもなく、自分が決断し、行動し、その先にしかない。しかも、その時点では、それが正解かどうかだなんて、誰にも分からないのだから、そりゃ大変です。就職の特集をしようとなった時、ほんの数年前まで学生さんだった方々に登場いただき！ということにしました。きっとみなさんと同じような時代の空気、大学の空気を吸いながら、同じように悩みを抱えていたリアルな経験が聞けると思ったからです。もちろん、誰も同じ道を辿ることはできません。けど、この特集を通して、未来に向けて、皆さんの背中を押して、少しでも勇気を出させてあげることができたら、これ以上に嬉しいことはありません。(大西正紀 + 田中元子/mosaki)